

火星

平成二十五年三月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

探梅の途中高山右近像

お山焼き遠に始まるはぐれ鹿

魚の氷に上ると甕の目高たち

うすらひのただよひそめし金閣寺

我へ来るさざ波バレンタインの日
春泥を跳ぶ老人の拳かな
極楽坊あたりはげしき春の雪
はたかれて春の塵吐く草箒
春服の随ふ沓のひびきけり
浅葱のほんのほまちのあをあをと

平成二十四年度火星賞作品自選二十句

坂
口
夫
佐
子

舞ひおりて寒さたたみし鶴
立春の部屋のどこやらきしみけり
八百段のぼつておりて水温む
大鯉のゆりあげし泥御開帳
大鉦を提げて八十八夜かな
書き直す一行に春暮れにけり
帰省子のひたすら眠る足裏かな
本殿の燭落しゆくかなかな



鳥つるむ寺の玉砂利青みけり
鼻あげて口の三角春の象
暗き眼の氷に映る桜鯛
あたりまへのやうに驚める植田風
まなうらの父を拭ひしハンカチーフ
燕去に轍の泥の翡翠いろ
浅沓の音の八月十五日
射干や男無頼でありしころ
新聞紙に寝かせ涼しき高野槇
祭壇に燐寸のすられ冷まじき
八朔のサイフォン点す睫かな
天心の月へ跳びけり猫の胴

太白星

寒月にたちまち着きしエレベーター
耳が浮き河馬の子が浮きクリスマス
雨にほふ暮るるに間ある冬田道
倒木を揺すり冬山ゆすりけり
枯山を間近に体温計挟む
ちちははに訛のありし薩摩汁
荒物屋の箒逆さに年の暮

杉浦典子

浜口高子

枇杷の咲く北窓の辺のぬくみかな
チエーンソーの止まりし寺領暮早む
蓮骨の間にひとつ生まれし泡
湯気たてて枯野の馬となりゐたり
雪螢組まれし足場抜けきたり
漁火の遠のいてゆく蕪蒸
谷底を耕してゐる息白し

火星作品

山尾玉藻選

踏み抜いて水のにはほへる獵銃期
宝塚蘭定かず子
冬眠の森へ地下足袋入りゆけり
ポインセチアいちにちゆるきものを着て
窓硝子みがかく天皇誕生日
枯野めぐれる全長の翼かな
八幡大山文子
木像の袈裟に色あり隙間風
底冷の庫裡より入る一休寺
茶畠の深空に年の詰まりけり
餅搗や母のパーマのちりちりす
拭きたてめ窓を鼪の過りけり
うしろ手に歩むごとくに寒鴉
西宮米澤光子
電柱を鉤登りゆく雪もよひ
足跡に月明溜まる猪のぬた

悴みて木椅子にこつと尾骶骨
夜の卓の皮手袋に握り皺
龍の玉沈みゆく水浅からず
水に浮く油なないろ寒に入る
ヘツドライトの一閃ありし金屏風
毛衣の夜気にまぎれて来し匂ひ
いくつもの紙箱たたむクリスマス
冬の虹木白が椅子に仕立てられ
ジョーカーの手のうちにある虎落笛
絵襖の奥より寢息雪くるか
年の空大いなる灰舞ひ上がり
波に放る鳥賊の腸寒土用
初しぐれ火床に罅の走りたる
見えてゐて黒鳥の水ありにけり
心中の噂となりぬ薬喰
選り好みするまでのなき海鼠なり
寒晴や海より山の形なり親し

八幡坂口夫佐子

宝塚山田美恵子

神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

選句力とは直観力。私が「選のあとに」を綴ることは自分にとって自分の直観力が間違いはなかったことを再確認する為の好機であると考えている。しかしこの直観力は生れもったものではない。自分が作句する努力を惜しまず、より多くの作品に出会い、こころを籠めてその作品を受け入れる修練を重ねていってこそ培われるものである。火星の皆さんも、常に作句という現場で労を惜しまず、現場の仲間の声に一層真摯に耳を傾けることに努め、この道をたゆみなく歩み続けて頂きたい。

とは言うものの、人の表現力には限りがあり、また言葉を尽しすぎて虚しい結果を呼ぶ場合もある。私の拙い句評が却って一句の魅力を損なうのではないかと危惧する場合も度々である。今月の優れた作品の中にも、私が言葉を添える必要のない旨味ある作品が多々あった。しかし「選のあとに」では作品の美点に触れることが私の務めでもあり、その辺りをくみとりながら読み進めて頂ければ大変有難く思う。

踏み抜いて水のはへる 獵銃期

蘭定かず子

作者がずかと踏み込んだのが猪や鹿のぬた場や谷間の湿地であったなら、水が匂っても不思議はない。しかしそうでは

なく、枯深い山中のたまたま水を含んでいた箇所であったのだろう。作者にとつて水の匂いは思いがけぬものであり、山の寒気にふと厳しいものを感じたに違いない。このちよつとした気の引き締まりが、獵銃期という特異な季節感を意識させたのである。

木像の袈裟に色あり 隙間風

大山 文子

古い御堂の中で剥落する木像を目の当たりにする作者。「袈裟に色あり」と袈裟だけを断定した点から、よく見ると袈裟にだけ塗料が斑に残っていたことが知れる。いずれこの袈裟の色も失せることだろう。木像の過去から現在、更に未来へと留まることなく流れる無限の時間が、作者の感傷を大いに誘ったことだろう。「隙間風」の佻しさがその感傷を一層深いものにす。

夜の卓の皮手袋に握り皺

米澤 光子

卓上に脱ぎっぱなしの皮手袋が置かれている。この手袋の持ち主は、手袋をはめた手で何か重たい荷物を提げ戻ったのだらうか、それとも余りの寒さに両の手を握りしめて帰って来たのだらうか。ごわと置かれてある皮手袋の握り皺に焦点を絞り、皮手袋ならではの有り様を鮮明に且つ的確に描いて見せた。(以下略)

恒星圈

飯塚 糸子

湧く雲に流るる雲に石路黄なる
数へ日の油地蔵へ酒供ふ
赤き実の足湯へこぼれきたりけり
炭返す母の手首の思案かな
塩水をくぐりし林檎年詰まる

伊勢きみこ

ゆんでにギブス牡蠣雑炊を匙で食ふ
ランドセル走つてはしつて息白し
マフラーの色ほめらるる句会かな
湯豆腐や大吟醸に頬をそめ
宇治川の匂ふあたりの枯木山

蘭定かず子

北塞ぎゆつくり開く紅茶の葉
鍋焼に眼鏡くもらす先斗町
着ぶくれて大王松葉拾ひけり
牛飼の昔ありけり懸大根
跳炭の炎色の美しき年の市

数へ日や中京に昼すこし酔ひ
谷空に昨夜のけはひや初氷
靴音の待たるる扉クリスマス
いつまでもみがくグローブ冬休
見覚えのあり立読みの革ジャンパー

渡辺数子

日当れる右近の橘冬構
枯蓮の水に映るを見て飽かず
年詰まりけり弥陀堂の枯蓮
紙袋誰も両手に師走かな
数へ日の昼を灯せる佃煮屋

獅子座

山尾玉藻推薦

井上淳子

白菜をくたくたに煮て母とゐる
今年また海鼠届きぬ夫呼びぬ
笹鳴や陣取り合戦始まりぬ
引き売りと橋に行き交ふ十二月

西村節子

一等に美しき落葉と呉れにけり
退りては鋤振る人に冬の虹
からかさの屋号廻せる湯ざめかな
白足袋の錦天神出できたり

涼野海音

冬に入るポトルシップのうすぼこり
凧へ向かつて歩く黒靴
みな去んでしまひし道の雪兎
手のひらに日の差してをり返り花

西畑敦子

鉄橋の鳴りはじめけり冬の虹
ほんたうのこと聞かぬまま息白し
大年の奥の間に座す旅靴
寒林の奥へ奥へと人力車

田中文治

城壁に人立ちあがる霜日和
夕暮の竹垣跨ぐ干大根
鳥影に雪見障子を開けにけり
釣舟を下りる白息をんななり

根本ひろ子

神苑のまだ明けきらぬ冬ざくら
日影れば日影の美しき冬もみぢ
搔卷をいくたびも出し捨てられず
二上山は落日いろに札納

石井耿太

紅さして子供義士ゆく冬うらら
大竹に宮司の撓ふ煤払
初雪とともに降り立つ故地の駅
主亡き部屋の寒さやソファーまで